たる通りの其儘にて人を樂ましむるものなり。之が研究家の目差すべき點にして。要するに作畫の動機が既に鄙野ならば。如何にキレイ上手なりとも俗氣耐へ難かるべく。若し又キレイ上手なるが上に畫家の心氣高潔なる作品ならんには。美は彌々美にして麗倍々麗ならんこと。朝日に匂ふ山櫻の如く其美は愛すべく其品は侵す可からざるものあらん。

元來畫と云ふものは人が見て樂しむものなる故。キレイなるが本當にて。強いてキタナイ畫をかくにも當らざることながら。キレイな畫は惡るくすると俗に流れたがるものなれば。キタナイ方が先つ高尚らしく見ゆるとは云はるゝなり。併し之は姑息なる消極的の考へにして。無論一般に通用するものには非らず。蓋し畫に限らず。凡そ人世の心がけとしても。自然の儘なるが最上の美にして。紛飾せる技巧の美は。其實は大の醜なること僞りなき處なれば。研究家諸君は只此心得を以て。平氣に我本領の自然を發輝することを專一と爲されなば。綺麗な畫の出來ることもあらん。キタナイ畫の出來ることもあるべし。そんな事には無頓着に。唯高潔なる心氣を以て。上手になることのみを心がけらるべし。」

ラスキンの山岳論〔六〕

小島烏水

それから、高山性の山岳、低山性の山岳、山麓、となつて山の實相を講じてゐます、あまり長くなるから、こゝには山岳の雪が、如何に多く畫家に、忘られてゐたかといふ點に就いて、述べてあることを、御話いたしませう。山岳の形體を、考察することは、勿論必要であるが、高山には、所謂萬年雪と稱して、消えない雪がある、その不斷の雪のために、山形が幾分か變化してゐることを、認めなければならぬ、冬景色の畫は、月夜の風景畫と同じく、有り觸れてゐるが、ラスキンに依ると、ハントや、デ、ウイントの作品に、やゝ見るべきものを認めた外、まるで不可い。

ラスキン説いて曰く、凡そ自然の無機體の中で、溫かい光線の下で見る、新らしく、深く、積もつた雪ほど、完全に美くしいものは無からう、その彎曲(カーヴ)は完全で變化があつて、その表面と透明は、極美に近く、不盡の變幻ある光と影、その蔭は鋭く、蒼く天色があり、反射したる光は、烈しく無數で、刹那々々の飛び交ふ光と、混じてゐる、その壯嚴は、人間の手で近寄れないが、その形體と光線に注意すれば、研究次第では、暗示することが出來る、今アルプス高山の雪に就いて、稀に畫かれたものを見るに、その形態は白い岩でなければ、岩の上を輕く雪で粉抹したのに止まつてゐる、バアヂングの、バイロンの詩に挿繪として描いた高山の雪は、比較的最も佳いが、それでも眞の解剖が出來て居らぬ、スタンフイルドのは、雪の代りに白い岩を寫したといふまでだ、雪は素より山の形體に依つて積むのであるから、下地の山の物質からして、看破しなければならぬ、雪はその後で落していゝのだ。併し雪は、單に外套のやうに、被せられてゐるのでは無い、雪は岩が持ち切れなくなる程度までは、積もつてゐる、その殘りものも、冬には氷つてゐるから轉げ落ちない、一ッの高山が荷つてゐる雪は、一と冬一定の場所に降る雪の分量よりも多いのである、さうして春の雪融の頃、崩雪(アヴァランチ)となつて墜ちるのだ、それからも、强い日光に當てゝ、岩が持て餘した雪が、少しづゝ墜ちて、谷間や崖の緩斜面へ落ちるのである、だから山の深雪となると、岩の原形を、必ずしも表現しないのである、峰から峰へと繫がつた花環(フエスツーン)のやうに懸つてゐる、さうして風向きの如何によつて、山形の彎曲(カーヴ)と、大さ次第に依て、變形をしてゐるのである。

更に順序を立てゝ述べると、山から直ぐ剝かれるやうな外套の雪は、高い山に、暴風雨の後始めて見るもので、粉抹したやうに閃いてゐるのが、それで、高山雪の第一期だ、それが晝は融解し、夜は再び凝結したりしてやゝ動搖しながら、山の嶮しい傾斜側に、殼皮を作つてゐるやうになるのが第二期である、その上に雪が高嶺の秀拔した岩に冷結して、舊雪の上に新雪が加はり、或は山稜の窪所に停滯したりして、岩とも雪とも區別のつかない雪壁(コルニイス)が出來る、最後に山脈が雪に沒せられて、深く滑らかに、拂拭的に、凹凸なく、只だ大體の山

の輪廓に從つて、雪線を作るのである、故に畫家は、高山の雪を簡單に、白い山と思つて描いてはゐけない――今日、そんな無造作な考で作畫する人は無からうが――さうして雪の堆積を荷つてゐる山岳の群落と思つて、岩石の粗剛な、刺々(とげ〳〵)しいギザ〳〵と、雪の微妙なる彎曲(カアヴエーチウア)との、反對と一致の境地に着眼して欲しい、それまで細かく研究して描いた作が、今まで又見當らないから、作例に照らして、説明するわけにはゆかないと斷つてある。

ラスキンは、瑞西を好む、小舍(シャレット)も、三脚も、牛鈴も、乳酪も、何にも要(い)らないが、天と地の間の結合線なる、純潔神聖の山岳が、欲しいばかりだ、と氣焔を吐いてゐる。

日本**アルプス**で言へば、白馬岳附近の連嶺には、夏でも猶このやうな雪の光景を、認め得られるかも知れないが、南**アルプス**の白峯赤石連嶺では、冬期だけにのみ、覗はれる現象である、併し冬は、これ等の山に近寄ることが出來ないから、このやうな微細(デテイル)が、果して雪の畫に、説明し得らるゝ事なるかは、明言出來ない。

第四卷に於て、**ラスキン**は山岳の材料を説き、結晶片岩や、粘粉岩やに就いて、硬軟岩石の結合を檢査し、次に高山、低山に分ちて、山の彫刻を説明し、次いで部分々々の形式美に遷つて、針峯(エグイルクレスト)、山冠(プレシピイス)、絶壁(パンクステン)、岸、石等に、名章を分つて、研究し、最後に、山岳の暗黑方面と、光明方面とを「山岳の幽暗」及び「山岳の光榮」の二章で、至つて可感的の方式で描いてゐる、こゝへ來ると、**ラスキン**は科學者でも、自然主義の作家でも無く、熾烈な感情を有する**ロマンチスト**のやうになつて、燃え盛りの燭を秉(と)つて四邊(あたり)眩ゆく、振り廻してゐるのが解る。私は『日本**アルプス**』の著者なる**ウオルタアウヱストン**氏が、「山岳の光榮」の一節を額(がく)にして、柱に飾つて、私に愛山宗の信徒になるべく、説明してくれたことを憶ひ起す。

私は、**ラスキン**と、その偉大なる感化力を信ずる。併し**ラスキン**の山岳論が、全部そのまゝで我等に認容されないのは、根本的に各人に存する、所見の相違は素よりとして、地球の冷却によつて出來た、所謂褶曲性の**アルプス**大山嶺と、火力によつて出來た、火山なるものゝ多い我國の山岳との、性質上の相違であります。それ

にもう一ッは、アルプスは、一體に日本の中央大山系(甲斐、信濃、飛驒、越中、越後に亘る山、所謂日本アルプス)に比べて、山が高い上に、緯度の關係上、概して千七百米突、即ち加賀白山位の高さからは、雪線に入つてゐる、雪線とは、御承知の通り、雪が恒に存在して、夏が來ても、融解しないほどの、高さの境界線を言ふのであるから雪が氷るなり、氷がその粘滑性のために、徐々と流動する氷河(グレシア)になつて、これがアルプスでは一ッの恐ろしい造山力になつてゐる、山の斷崖でも、山稜でも、又谷河でも、湖水でも、この氷河の造營したものが多い、これが日本の山岳には、絶無で、白山より一千米突も高い富士山ですら、氣候が溫か過ぎて、未だ雪線に入らない程であるから、其外は、推して知られる。

即ち日本山谷形體の起因は、主として風化作用(ウエザアリング)から來る浸蝕(エロージョン)から生ずるので、又火山では爆裂(エキスプロージョ)から來るので、アルプスのやうな、褐曲に、萬年雪に、氷河と、三ッ重なつたものから來てゐるのとは、大きに違ふ、私はアルプスを親しく視たことは無いが、一體に向ふの山は、角度が鋭くて、氷河の堆積のために、山形が日本に於けるよりも、より多く堆積物に左右せられてゐるのでは無いかと思はれる、隨つてラスキンのやうな議論も、出て來るのであらう。

假令それが無いとしてからが、アルプスには水成岩の高山が多い、其一例を擧げると、日本では石灰岩の山は、皆低いものばかりであるが、先方では石灰岩の變化した白雲石から、成立してゐるドロマイトなどといふ、一萬尺以上の高山があつて、高山絶壁の標本とも言ふべき斷崖を作つてゐる、が日本には見られない現象である、從つて水の色から、山の容から、違ふ點が大分多い、日本の山岳は、概して火山や水成岩の、緩角度の彎曲が、曲形(カーヴ)を成してゐるやうで、低い代りに、どこか悠つたりと落ちついてゐるやうだ。

從つてラスキンの議論を、成るたけ多く宛て嵌めて行かうとするには、地質學者ナウマンが、構造アルプス山によく肖てゐると言つた、四國山系へでも持つて行つて、對照して見る方が、近いであらうが、これとて、小規模で、且つ雪が無いから、どこまで併論していゝかは、疑問である。

最後に我等が如何にラスキン先生に、負ふところがあるかといふ點を、說きたいと思ひます、ラスキンは十九世紀の過ぎ去ると共に、十九世紀が遺留した世界最後の文豪となつて、世を去りましたが、その敎訓は、未だ殘つて居ます、二十世紀となりました、空は煤煙で黑くなり、自然の顏は蜘蛛の巢のやうな電線の綱や、鐵道の絲で、張られました、空には禽の聲が消えて、殺人器械の呻きや、火の粉が飛んでゐる、勿論生存競爭の激甚や、人類の進步は、物質器械に、多く負ふところもあるから、夢のやうな空想や、美の情緖などに、未練を殘してゐられぬ世の中となつたでありませう、併しながら、人類の本然は、未だ器械化されるほどに、冷酷乾燥では居られませむ、我等は今、やつと二十世紀の門戶に達したばかりである、門の中には、何が藏せられてあるか、誰にも解らない、併しながら緣日で、植木の一鉢も買つて來るだけの餘裕の、失くならない限り、我等は、ラスキンの敎へを待たなければならない、否、失くならうとすればする程、ラスキンに、自然に對する眼を開けて、もらふ必要がある。

文藝にまれ、美術にまれ、かういつた精神的の事業は、形式や算數で、證明の出來ない事が多いから、ラスキンの感化が、これだけであつたと、指すことは出來ないけれど、生存中に、ラスキン研究の團體が、方々に出來たことは、今まで其例が、絕えて無かつたことであると言はれてゐる。初めてのラスキン、ソサイヱチイは、一千八百七十九年に、マンチヱスタアに出來て、それから倫敦、グラスゴー、リパアプールにも出來た、是等は今猶現存してゐるといふことであります、一千八百八十七年では、ラスキンの生國スコツトランドで、ラスキン讀書會が成立しまして、英蘭土や、愛爾蘭土にも支部を有して居ます、さうして未だ存在してゐるかどうか知りませぬが、ラスキンの文學及び社會の見地を、研究する機關として、イグドラシル(Igdrasil)といふ雜誌まで、出來ました、最もその外にカアライルや、トルストイのやうな、ラスキンと略ぼ同見地に立つた、人道の戰士をも、併てこの雜誌では研究してゐるやうであります、それから米國に渡りましては、流石に同文の國だけに、ラスキン研究の倶樂部や、階級が多く設立されたのであります、猶亞米利加のケンネツシイ州では、

社會黨の立てた町があります、この住民の中の勞働者は、ラスキン聯合協會の名の下に團結して、町の名を「ラスキン」とつけたさうです、斯の如く無數量の人々は、蜜蜂のやうに、ラスキンといふ花に簇つて、その甘味を吸つたり醉つたりして飽かないのであります。

ラスキンの書は、外國では、あまり飜譯されてありませむ、それはラスキンの文體が、飜譯に困難であるといふ理由のみならず、ラスキンの心底からの叫びを、打ち明けて聞いてくれるものは、やはり英語を話す國民であらうといふ信念から、ラスキンが多くの場合に、反對したからでもあります、併しながらラスキンは、ヴヱニスや、アルプスを紹介したゝめに、伊太利國民は、最も多くラスキンを德として、認識して居ます、隣國の佛蘭西では、猶多くラスキンが紹介されました、孰れも有力の人々によつて、ラスキン研究が、彼地の有力な紙上で、發表されてから Le Ruskinisme (ラスキン好み)が、巴里流行の中心になつたこともあつたといふことです。

日本でも、ラスキンの飜譯は、文學では「近世畫家論」の抄譯や、斷片譯が、少しばかり出た位であつて、道德に關する講話の一二種は、譯されたかも知れませぬが、先づ甚だ乏しいやうであります、今の日本の文學界は——おそらく美術界も——大體に於てラスキンを一旦通過して來なかつた哀しさには、自然研究が隨分疎そかで、人間方面から比べると、際立つて劣つてゐるやうに思はれます、下駄を片跛足に穿いて、大道を歩いてゐるやうに見えることがあります。

併し全く無いではない、島崎藤村氏の「雲の研究」德富蘆花氏の「自然と人生」それから蒲原有明氏の或散文の作品などに、ラスキンの影響は認められるやうに思ひます、又志賀重昂氏の「日本風景論」が出たのも、所謂科學と文學とを調和したと稱する、自然主題の類書が頻に出たりするのも、日本山岳會の成立も、各自に於て意識すると否とに係はらず、ラスキンの影響を受けないとは、言はれないであらうと思ひます。

ラスキンは、永久に忘れられない人です。(完結)